

優秀修士論文概要

立原道造詩学の研究

——統語法とレトリックの詩学——

須田 慎 吾

日本近代詩とはごく一握りの文学者たちによって明治期に創作された人工的な文学形態であり、彼らは一様に西洋詩の模倣から出発した。だがこうして成立した近代詩の多くは、音数律という詩法ばかりか、内容的にも新古今以来の古典的抒情を受け継ぐものだった。本論の研究対象である四季派の立原道造もまた、同時代的には同様の系譜に属する詩人として捉えられてきた。

西洋詩における古典的な詩法、すなわち歩格および韻というシステムを導入しようと試みながらこれに失敗した日本近代詩にあつては、音数律を手放すことはすなわち、それを詩として成立させる原理そのものが失われることを意味する。だが日本近代詩の一部には、これまで言われてきた「内在律」「内部の韻律」¹といった仮説の域を出ない概念よりも明確な形で、そのような内在的論理が存在しており、殊に立原道造という詩人においては、確かにそこに独自の詩学と呼ぶべきものが存在すると考えられるのである。

以上の背景を論じた「序論 立原道造研究と詩学 —— 日本近代詩史における立原詩学 ——」に続き、本研究では主に立原道造の二冊の詩集『萱草に寄す』（風信子叢書、一九三七年）、『暁と夕の詩』（風信子叢書、一九三七年）を対象にその詩学的問題を分析し、これまで印象的に語られるば

かりだったその詩文の「本質的なわかりにくさ」⁽²⁾に具体的に分け入ること、立原詩を成立させる原理と呼ぶべきものを解明しようと試みた。

右の目的を達成するために、まず「第一章 立原道造の統語法 —— 立原詩学を支える根本原理 ——」では、これまで立原道造の詩文最大の構文的特徴として着目されてきた「修飾句の絶対化」⁽³⁾等と呼ばれる現象を、措辞やレトリックという観点から分析するところから出発した。これにより、その詩文が特徴的な句読法を基盤に成り立っていること、そして句跨ぎ、倒置法という二つの技法が「絶対化」の原動力となっていることを突きとめた。この議論をさらに推し進め、続けて統語法の分析に踏み込むことで、右の修飾句に限らず、ほぼ全ての句がそれぞれ互いの関係性から切り離され、一定の独立性を維持していることを示し、その上で、このような統語法によって、時には従属句が主文よりも優位に立ちながら詩想上の中心的な役割を担ったり、また通常では結びつき得ない構文要素同士が詩学的に結びつき、そこで意味の再構築が起こっていることを確認した。つまり立原道造に特徴的な統語法とは、自身の求心力が破綻しないぎりぎりのところまで自己解体することによって、散文とは異なる右のような論理を獲得しようとするものであり、それによって詩文を成立させるという原理的な意味を持つものだったのである。

この第一章の結論を土台に、続いて「第二章 立原詩における修飾句の機能 —— 曖昧性と多様性の様式 ——」では、その構文要素の中でも多く言及されてきた修飾句の機能、その詩学的な意義につき再検討した。立原道造の詩文は構文的に修飾句が非常に多く、その修飾関係や構造が複雑であることはよく指摘されるが、その意義については、音楽性の問題や「絶対化」した際の機能的な議論にとどまっていた。本章ではこの修飾句をより広く捉え直し、中でも詩学的に着目すべきと思われる二つの用法、すなわち修飾句の羅列、そして了解困難な比喻表現につき分析した。これらが

積極的に詩文の叙事的内容をかき消し、あるいは構文的な独立性を高めながらその特徴的な統語法を機能的に支えることによって、詩想の曖昧性を豊かに増幅していく様を確認し、修飾句がそうして読者に強い印象を与えることで求心力を高めつつ、結果的にその背後に何らかの「物語性」(傍点原文⁽⁵⁾)を招き入れていることを示した。すなわち立原道造の詩文における修飾句は、第一章で論じたような統語法による散文的論理の解体を支持するだけでなく、その詩様式を支える重要な構文要素でもあったと言い得るのである。

これらを踏まえ、「第三章 詩学からみる立原個人史——立原詩学はどのようにして成立したか——」では拾遺詩篇も含めた詩人の仕事を経時的に辿ること、詩学的な観点から個人史の再構築を図った。近年筑摩書房より刊行された最新の個人全集において新たに未発表作品が収録されたが、いまだこれらを詳細に分析した研究はない。今回これに新たに光を当てると共に、これまで着目されてきたフォルムや形式とは異なる、詩学という新たな視点を立原個人史に持ち込んだ。その詩史に関しては短歌から詩への転換期に採用されていた四行詩型や、また立原道造のトレードマークとも言えるソネット形式に多くの議論が費やされてきたが、本論第一章や第二章で検討した統語法やレトリックをもとに立原詩学の発展史を検証することによって、これをおよそ四期に分類すべきであるとの結論を得、その上で、これに続く二度目の統語法実験期とソネット形式採用が重なる一九三五年(昭和一〇年)秋を立原詩学の成立期と位置付けた。またこれに先駆けた同年春のリルケ翻訳業がその詩学形成の決定的な転機となっていること、そして一旦破棄した実験的統語法を改めて自身の詩学の柱として位置付けた立原道造が、無秩序に陥ろうとする詩文たちをフォルムによって支えるためにソネット形式を定着させた可能性があることを示した。

続いてその延長として、「第四章 立原詩学における翻訳業の意義

——立原道造によるリルケ翻訳詩の研究——」では立原詩学の確立において翻訳業がどのように作用したかという問題に踏み込み、特にその決定的な転機になったと思われるリルケ翻訳業を分析した。これまでリルケと立原道造の関係については受容と影響という研究にとどまっており、またリルケ原詩と立原道造による訳詩を突き合わせた研究はなかった。そこで今回、多くの詩集収録作品が書かれる前年、『四季』誌上に発表されたリルケ『第一詩集』収録の「Jeden」中、「I」「VI」「XX」について、原詩と立原道造による訳詩「愛する」を比較検討し、その翻訳作業を詳細に分析した。主に「I」では修飾句の羅列・自律化について、「VI」「XX」では句読法や倒置法、句跨ぎ、そして統語法について分析し、リルケ訳詩中すでに立原詩学の特徴が確認されるだけでなく、右の手法が翻訳という行為によって発見され、また方法論として採用された可能性あることを示した。こうして立原道造が独自の詩学を打ち立てるその道のりにおいて、リルケ翻訳という行為が決定的な役割を果たした可能性を発見した。同時に、言語システムの大きく異なる他言語の翻訳によって生まれた効果が、場面によっては独創的な詩的表現と捉えられたり、あるいは果敢な文学的実験として理解される、といった事態を指摘し、翻訳論のような研究分野では肯定的に捉えられることの少ないこうした現象の中に、積極的に詩学的な可能性を見出し、それを詩法の中核にまで据えようと試みた、立原道造という詩人の特異な詩学的態度をも示すことができた。

以上の研究のひとつのまとめとして、「第五章 引用法にみる立原詩学——本歌取りに関する議論をめぐって——」では、これまでの研究でも多く取り上げられ、また実のところ立原道造の詩学的特徴を体現していると言える技法、引用法につき検討した。これらは長らく、『新古今和歌集』的な「本歌取り」として一様に理解されてきたが、改めてより広義の詩的技法として捉え直すことで、その大部分があらゆる面で「本歌取り」の定

義から外れる用法であることを示し、まずはこれまでの「本歌取り」研究という文脈からこれを解放した。その上で、「はじめてのものに」最終連の「いかな日にみねに灰の煙の立ち初めたか」、それに続く「エリーザベトの物語」等の引用部を取り上げ、これらがやはり散文的論理の解体と再構築を手伝いながら、一篇の詩の中で設定された主な舞台に、敢えて時代や国の異なる詩空間を裏写しにすることによって、重層的なモチーフや詩想を形作るうとする立原詩特有の様式をも浮き彫りにした。それは統語法をぎりぎりの地平にまで解体し、句同士の新たな関係性を再構築しようとする詩学、さらにはそれを補助するかのように、構文解釈の多様性と詩想の曖昧性を拡張させる修飾句たち、それらの延長線上に位置する存在なのであり、つまり立原道造の詩文における引用法は、それ自身が詩学の側面であろうとすると同時に、その様式を支える重要な柱であったということとをここに論証した。

最後に「終章 抒情詩か象徴詩かフォルマリスム詩か——立原詩学研究に関する今後の指針——」で本研究の総括を示すと共に、立原道造という詩人が日本近代詩史の研究において大きく評価や位置付けが分かれることの意味を論じ、論者の今後の研究指針を示した。

以上により、これまでの立原道造研究において体系的に分析されてこなかった統語法をはじめ、その詩文を成立させる内在的論理と呼べるものの全容を俯瞰することができ、またそれによって立原道造が目指した詩の様式を示すことができたと考える。

注

(1) 萩原朔太郎「リズムの話」(『萩原朔太郎全集 第六卷』筑摩書房、一九七五年一月、三二八―三四三頁)等を参照。

(2) 栗津則雄「立原道造——回想的感想」(中村真一郎編『立原道造研究』思

潮社、一九七一年三月)二三三頁。

(3) 菅谷規矩雄「幸福な詩人の不幸な詩 錯叙の語法」(『現代詩読本4 立原道造』思潮社、一九八三年六月)一五〇―一五三頁。

(4) ここでは西洋詩学で言うところの「英・Englishity」を意味する。テリー・イーグルトン『詩をどう読むか』(岩波書店、二〇一一年七月)三三三頁等を参照。

(5) 野村聡『立原道造』(双文社出版、二〇〇六年二月)八頁。

優秀修士論文概要

日本近代文学における
〈フィリピン〉の表象

——植民地／戦場における「吊い」を中心に——

金子 聖 奈

本修士論文は国家間の表面的な「和解」と「忘却」によって等閑視されてきた〈フィリピン〉という空間、フィリピン／日本間を越境移動する人びとに注目し、それらを日本近代文学がどのように表象・記号化してきたのかの一側面を明らかにするものである。

本研究の背景には二つの潮流がある。まず日本近代史・文学における「南方」や「外地」の研究である。⁽¹⁾それらは戦間期を中心に使われた「外地」「南洋」という政治的空間把握に基づいて成果をあげているが、明治から戦後へ繋がる時間軸において連続的に眺め直す通時的視座を見逃している。もう一つは「移動」や「越境」に関わる文学研究である。⁽²⁾ここでは「移動」が東アジアやアメリカでの問題とされ、「南方」と括られた空間が切断されている。そこで、「移動」というグローバルな問題に日本と東南アジアの関係を導入し、とりわけ〈フィリピン〉に焦点化した議論を展開させた。〈フィリピン〉に着目する理由は、比日国家間の表面的「和解」により、個々の越境者たちは閑却され〈フィリピン〉に関する日本人の集合的記憶が形成されなかった点を問題視するためだ。明治期から日本はフィリピンへ大量の移民を送っていたが、東南アジア唯一の米国の植民地であったため激しい戦闘が起き、多数の市民が犠牲となった。戦後フィリピンには強

い対日悪感情が渦巻いていたが、「和解」の成功によってそれは不可視化され、日本人の記憶からも「忘却」されたのである。

以上の問題に対し、本論文ではアジア太平洋戦争と関わる一九四〇年前後と、戦後賠償と関わる一九六〇年前後の作品に注目し、大石千代子「山に生きる人々」(一九四〇)、『ベンゲット移民』(一九三九)と『ベンゲット道路』(一九六〇)、織田作之助「わが町」(一九四三)、大岡昇平「ミンドロ島ふたたび」(一九六九)を検討した。ただし、〈フィリピン〉とは権力が仮構する「地名とか国家といったフィクション」⁽³⁾であることは留意されるべきであり、個々の作品・問題系を〈フィリピン〉へ囲い込むこともまた避けるべきであろう。しかしながら、何が、どのように〈フィリピン〉として構築されたのかを問うことでしか〈フィリピン〉を「名づけ、分節し、囲い込」んだ権力的言説のありようを解体することもまたできない。

論者の立場は、G・スピヴァクによる「思考ないし思考主体を透明または目に見えない存在にしてしまう」のではなく、「自己自身の批判を遂行するなかで現前の言説がどのような道程をたどるのかを自覚する」という言葉に依拠する。⁽⁴⁾本修士論文は、「私」という「自己」が何か語るとき、「思考主体を透明」にするのではなく、「自己自身の批判」としてこれを論じるものである。

第一章 反語をよぶ〈フィリピン〉と「移民」

——大石千代子「山に生きる人々」論——

フィリピン・ダバオに移民として渡った日本人家族を描く小説「山に生きる人々」を扱い、フィリピンへの移住が宣伝されていた一九四〇年における「移民」の表象を検討した。また、作者の大石はナショナリズムに反省的でない作家として肯定的に評価されてこなかったが、小説「山に生き

る人々」の解釈からそうした作家像を相対化する可能性を提起した。

本作は「国策」に資する作品として発表されたが、テクストのフィリピン（フィリピン）の描写は読みの誘導を裏切り続ける。移民二世の娘は自明的に提示される「日本」が理解できず、フィリピンにおいては本当の「日本人」になれないとして日本へ旅立つが、それは帝国日本への強い欲望の表明であると同時に、〈フィリピン〉における帝国日本の増殖の失敗であることを反語的に露呈させ続ける。多様性や差異を帝国として認めることなく、あくまでも同一化を求める帝国「日本」は、ダバオの「移民」をその内部に取り込むことができず、「移民」は境界的人物とならざるをえない。同一化の可能性をめぐる描写から、「移民」が「棄民」となっていくことを予見させる作品であることを明らかにした。

第二章 大石千代子論——『ベンゲット移民』とその改稿におけるセクシュアリティを視座として——

第一章で扱った大石千代子の作家像について、本章ではジェンダー／セクシュアリティに関する作品の描写を視座として検討を加えた。大石については『ベンゲット移民』と、戦後改稿された『人柱』、『ベンゲット道路』が一貫して代表作と見なされ「社会派作家」「移民文学作家」という評価が支配的であった。そうした一面的評価に対し、大石が戦後に女性としての自己を問う私小説的作品を描いたことをもとに、戦後の「ベンゲットもの」の表現と改稿を分析し、作家像の再構築を目指す。

アジア太平洋戦争の前後で同じ物語を改稿した『ベンゲット移民』（一九三九）・『ベンゲット道路』（一九六〇）は、「国民」＝「人間」＝「男」という男根のモチーフを中心化し女性を周縁化している。その一方で「からゆきさん」の言動が同性愛的なセクシュアリティを引き起す仕掛けもある

り、男性移民のホモフォビアに基づくホモソーシャルは混乱を見せる。「国民」の枠から女性を排除する力学は『ベンゲット移民』から『ベンゲット道路』への改稿によって強化されているとも見られるが、「女」を「畜生」とまで表現するこの作品群は、女性が家父長制に抑圧されつつ「人間」としての声を奪われていく過程を可視化している。以上の作品分析から、〈フィリピン〉という題材は彼女が「国民」という装置に参入するために必要とした場であったと結論づけた。

第三章 織田作之助「わが町」論——〈フィリピン〉を「嘔む」身体——

織田作之助の長篇小説「わが町」は、前章と同様、ベンゲット道路工事を経験した人物を主人公とする。主人公・佐渡島他吉は、フィリピンから大阪へ帰還してもなお、大阪の新世界で「人力車」の俸夫であることによって〈フィリピン〉の記憶を提起しつづける。

他吉の「ベンゲットの他あやん」という自己像は、強く「嘔む」という身体性に依って立っており、「嘔む」ことに関わるオーラルな身体性が他吉の孫娘・君枝に〈フィリピン〉の記憶とともに伝播していく。この「嘔む」という身体性を通して、主要登場人物たちは「プラネタリウム」に映される「南十字星」から、多様な〈フィリピン〉像を受け取っている。

その中には「南進」の典型的なシンボルとして受容する登場人物たちがいる一方、主人公の他吉は「ベンゲットの他あやん」という自己像を象徴するものとして「南十字星」を意味づけ、自分が犠牲を強いた記憶（嫁婿をマニラへ追い立て、死なせたこと）も想起しつづける。〈フィリピン〉は、遠くにあるからこそイメージとして効力を持つてしまう。しかし、孫娘の君枝は〈フィリピン〉への意志を見せず「降るような星空」を眼に映すの

みである。この眼を、〈フィリピン〉における死者の「弔い」が〈フィリピン〉を非実体化する植民地主義的システムと不可分であることを可視化するものとし、作品の新しい解釈をひらいた。

第四章 大岡昇平「ミンドロ島ふたたび」における〈フィリピン〉——「弔い」のために描く「地図」——

本章は、一九九〇年代の海外戦没者追悼をめぐる議論を導線に、海外戦没者を「弔う」枠組みにおいて「ミンドロ島ふたたび」を検討した。本作品は、これまで同時期に発表された『レイテ戦記』を補完する資料として読まれてきた。だが、ミンドロ島という自らが駐屯していた土地にこだわった創作である点と、フィリピンにおける遺骨収集という戦後の「弔い」のあり方を問題化した点において固有の問題を持っている。「私」は一貫して「戦友」が「野ざらし」になっている「ルタイ高地」にこだわり、新たに購入した「地図」を手にもそこへ向かおうとする。しかしそこはフィリピン人にとつての「地図」では名づけられることも発見されることもない場所であり、「私」が想定する〈フィリピン〉の「地図」と、フィリピン人による〈フィリピン〉の「地図」は重ねることができない。その事態を認識したうえで、「戦友」を「弔う」ことを目指す「私」は、「野ざらし」になっている「戦友」の「弔い」を「ルタイ高地」で果たそうとするのではなく、「ここ」という未だ無名の場所でも果たそうとする。「私」の語りが、「ここ」という「弔い」の場に読者を招き入れることで、公的（政治的）でも、私的（自閉的）でもない「弔い」の場を模索することを明らかにした。

終章では、〈フィリピン〉に関する「弔い」という観点から総括した。

大石千代子『ベンゲット移民』については、「からゆきさん」や〈フィリピン〉の「部落の娘」が声を奪われ、一方では死者の声を暴力的に充填している点は批判されるべきである。また織田作之助「わが町」の、死者を〈フィリピン〉に仮託して「弔い」たいとする視点は、日本という帝国主体が〈フィリピン〉を実体なきイメージへと追いやることへと繋がる。それに対して大岡昇平「ミンドロ島ふたたび」では、死者を〈フィリピン〉において「弔う」ことのできない状況が描かれる。そこで生成される「ここ」という場所は、その不可能性と対峙した、〈フィリピン〉という他者を織り込む場所として提起されている。そのような場所に立つてこそ、比日間の「和解」とは何か、「忘却」されたことは何か、いまいちど考えることができるだろう。

注

- (1) 矢野暢『日本の南洋史観』（一九七九年八月、中公新書）、木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』（二〇〇四年三月、世界思想社）、神谷忠孝、木村一信編『外地』日本語文学論（二〇〇七年三月、世界思想社）、土屋忍『南洋文学の生成』（二〇一三年九月、新典社）など。
- (2) 伊豫谷登士翁・平田由美編『帰郷』の物語／「移動」の語り（二〇一四年一月、平凡社）、日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ』（二〇一四年二月、新曜社）、朴裕河『引揚げ文学論序説』（二〇一六年二月、人文書院）など。
- (3) 花田俊典『沖縄はゴジラか』（二〇〇六年五月、花書院）
- (4) 「サバルタンは語ることができるか」（上村忠男訳、一九九八年二月、みすず書房）